

保育者養成のための音楽技術グレード制度の試行

久光明美^{*1}・今津重紀^{*1}・阿部勝^{*1}・佐々木ちとせ^{*1}・山本芙美^{*1}・間谷功^{*2}・伊藤一統^{*1}
(*¹宇部フロンティア大学短期大学部保育学科, *²宇部フロンティア大学附属香川高等学校保育科)

A Trial of a Grading System of Musical Skills for Nursery Teacher Training

Akemi HISAMITSU・Sigeki IMAZU・Masaru ABE・Chitose SASAKI・Humi YAMAMOTO^{*1}

Isao KANTANI^{*2}・Kazunori ITOH^{*1}

(*¹Department of Nursery Education, Ube Frontier College,

*²Kagawa High School Attached to Ube Frontier College)

保育者の発信する音・音楽は、保育者のピアノ演奏能力に左右されるべきではない、歌唱技術の習得が核となることを主張したい。しかし、ピアノ技術の習得は、保育者を目指す学生にとって、歌うことや他楽器を演奏すること以上に重要な位置を占めているのが現状である。保育者養成校の学生の多くはピアノ未経験者であり、年々増加傾向にある。このように初心者の学生が2年という短期間でピアノ技術を習得することは容易ではないが、保育者養成におけるピアノ演奏技術習得の見直しと改善を早急な命題とし、音楽技術グレード試験の試行によって探ることとした。

キーワード：保育者養成，ピアノ演奏技術習得，グレード

1 目的

保育者を志望する学生の音楽経験は様々である。ある程度の音楽経験をもち、ピアノを弾きこなす者もいれば、ピアノに全く触れたことのない者もいる。また、合唱、ウインドオーケストラ、バンド、等々の経験をもつ者もあれば、全くない者もいる。こうした経験の差が演奏技術の差に直接的に反映されるのも、音楽分野のもつ特徴の一つであろう。

本学では入学試験の科目として、ピアノ実技等の音楽表現技術を課していない。このため、ピアノ進度は全くの初心者からソナタクラスまでと幅広い。ピアノの演奏技術が優れていることが、良き保育者の必須条件といえるかについては検討の余地があるところではあるが、保育現場において、少なくともある程度の、ピアノないし、それに類する鍵盤楽器で演奏表現技術が求められることは共通の認識といってよからう。ゆえに、学生それぞれの音楽歴に基づくレベルに応じた

効果的な指導、そして学習意欲を高めるための教育の方策を展開することが保育者養成におけるひとつの課題とされる。

そして、今回、これに対する方策の一つとして、「保育音楽技術グレード試験」の導入を検討・試行することになった。

2 音楽技術グレード制度の概要

音楽技術グレード試験は、各級に定められた課題を目指すことにより、実技、理論、より深く、広い音楽的見識等あらゆる側面から目標に向かってチャレンジするという向上心を高め、確実な成長が望めるものとして企図した。ピアノ技術の向上とともに音楽を通して表現する力をつけていくことのできるものとして、保育に最も必要と思われる弾き歌いの技術もグレード試験内容に課すことにした。